

50年前の夏

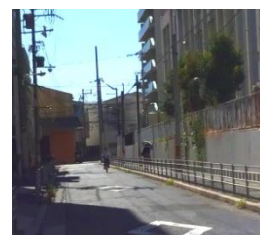
5日午後、大阪市大図書館から地下鉄あびこ駅まで歩いたとき、あまりの暑さに頭がクラクラするほどだった。あとから知ったが、そのころの大阪市の気温は38.9度と全国最高を記録していた。

50年前の大阪も暑かった。1971年3月、信州大学をなんとか卒業し、松本から大阪に向かった。いま考えると恥ずかしいかぎりだが、「学生運動」にのめり込んで、卒業単位を取るのに最後まで苦勞した。親の反対を押し切って、大阪で大学院「浪人生活」を送ることになった。松本城近くの書店で見つけた『社会資本論』を読んで感動して、宮本憲一先生のもとで研究しようと、大阪市立大学大学院経営学研究科をめざした。

とにかく大学近くの下宿しようと、先輩に紹介してもらった。杉本町2丁目の大きな家の土蔵造りの離れが、下宿先となった。下宿近くの銭湯前の公衆電話から、宮本先生に電話した。猛烈に緊張しながら、大学院ゼミに参加させてもらいたいとお願いした。すると先生から「ああいよいよ」との返事が返ってきた。

この5文字の返事が、その後の私の人生を方向づけた。親が反対した大阪暮らしなので、とにかくお金がなかった。正式の「聴講生」は経済的に無理なので、「もぐり」でゼミに参加させていただくことにした。先輩から塾や家庭教師のアルバイトを紹介してもらい、なんとか「やりくり」できた。大学院に入学してからは奨学金を手にしたが、浪人中はアルバイトが唯一の収入だった。本を買うために、できるだけ食費を切り詰めた。納豆と玉子にお世話になった。

下宿の前に大きな倉庫があり、日当たりや風通しも悪く暑かった。信州松本で4年間暮らしたせいか、大阪の夏はこたえた。扇風機を買うお金もなく、眠れない日が続いた。昼間はできるだけ冷房の効いた大学図書館で勉強することにした。アルバイトがないときは、朝9時から夜9時まで図書館で過ごした。



それから50年、半世紀が経つが、ふたたび大阪市立大学図書館（当時とは違う学術情報総合センター）を毎日のように利用している。人生は不思議なものだ。5日も炎天下、図書館の帰りに下宿のあった小学校近くを歩いた。奥に見える倉庫のうしろに下宿があった。昨年、倉庫横の空き地に高層マンションが建った。

下宿生活の楽しみは、信州の友人らから届く「手紙」だった。下宿のおばちゃんも、なんだか手紙を気にしていたようだ。手紙が届くと、すぐ返信を書いた。ある時までは。下宿のおばちゃんには、本当にお世話になった。1年目の受験は僅差で不合格になったが、一緒に涙を流してくれた。

もう1年だけ浪人を続けることにした。英語とドイツ語とともに、小論文にも力を入れて勉強した。それで2年目には合格でき、1973年4月から「正式の院生」になった

(2021年8月9日)